

～ 輝 きの 子 育 て ～

園長からのメッセージ

戦後80年となる今年ですが、テレビでも、戦後のいろいろなドラマ、映像が流れています。

女塚保育園は今年で創立70周年になります。昭和30年4月1日に定員60名で開園し、昭和33年6月1日より認可保育園となりました。初代園長は、太郎園長父の伯母、永田よし江でした。昭和52年8月病死となり、二代目園長は太郎園長の母、片野英子でした。

平成16年4月より3代目現園長、片野太郎が引き継いで現在に至っております。3代目でも、早21年の実績を持つ園長となりました。

先日、東京都民間保育協会で園長は協会会長より推薦を受け、東京都民間保育協会での理事となりました。協会の機関誌「とうきょう民保協 第185号」に簡単な挨拶、自己紹介を兼ね、園長の思いが掲載されました。皆様にも園長を少しでも身近に感じて頂きたくその文章を紹介させていただきます。

片野 英子

不適切保育で育った私

このたび、会長のご推薦を受け、初めて理事を務めさせていただくこととなりました。簡単に自己紹介を兼ねて、私のこれまでの経験や保育への思いを述べさせていただきます。あくまで一個人の私見としてお読みいただければ幸いです。

私は東京都大田区・蒲田の町で、保育園を営む家庭の次男として育ちました。母は園長として忙しく、父も高度経済成長を支える企業戦士であったため、忙しい両親の手が十分に回らず、私は“放牧”のような育ち方をしました。母のお気に入り一枚に、夕方、保育園の園庭で、誰もいない中、オムツを泥だらけにして遊ぶ2歳くらいの私の写真があります。それを見た保護者が帰宅した父に「いつもあの時間に一人で遊んでいる子、どこのお子さんでしょうね？」と尋ねたそうです。父は気まずそうに「さあ…」ととぼけたという、エピソードがあります。今だったらネグレクトで通報されてもおかしくないでしょう。

幼少期は蒲田という地域柄か、いたずらもたくさんしました。よく叱られ、よく殴られました。今で言えば「不適切」な関わりかもしれませんが、親や親戚、保育士、先生、地域の大人たちの厳しさの中に、ちゃんと“愛”を感じていました。

当時の保育や子育ての在り方は、今の基準では「不適切」と捉えられることも少なくありません。例えば、給食を残すと「作った人に申し訳ない」「ご飯粒を残すと目がつぶれる」などの言葉がけも日常的で、愛情ゆえの厳しさが当たり前存在していました。しかし、そうした中で育った私たちは、礼儀や我慢、時に反骨心といった、人としての大切なことも育むことができたように思います。

2018年の保育所保育指針の改定により、「子ども主体の保育」の重要性が明確に示されました。子どもの意思やペースを大切に、個の育ちに寄り添う素晴らしい理念です。ただ、現場の実情を考えると、子ども主体の保育を実現するにはまだまだ課題があります。保育士の配置基準は主要先進国と比べても十分とは言えず、実際の運営とのギャップに悩む現場は少なくあ

りません。

そして、従来の一斉保育から大きく舵を切る中で、保育者側の戸惑いや誤解も生じています。ベテラン職員を含め、意識の転換が求められる一方で、過渡期ゆえの混乱や極端な解釈が起るケースも見受けられます。

たとえば、「子どもが辛い思いをするかもしれないから」と行事を縮小・廃止するような極端な例が出ることもあります。今回の指針の改定は、子どもが辛い思いを無くすということではないと思います。子どもが大人になって幸せに生きていくためには、困難に向き合う経験や、人と折り合いをつける力、物事を乗り越える力を身につけることも大切です。私たち保育者が子どもに願うのは、優秀な大人になることではなく、「幸せな大人」になることです。

少子化が進む中、ニート、不登校、自殺、虐待といった社会問題が増え続けている現状に対して、子ども主体の保育が、これからの社会をどのように変えていけるのか——その可能性に期待と不安が入り混ざる思いを抱いています。

今回の改定を機に、戦後、急速に変化した価値観の中で薄れつつある日本の文化的背景や精神的基盤が、改めて見直されるきっかけとなることを願っています。子どもの育ちを中心に据えた保育の在り方が、将来、豊かな人間性と社会性を育んだ大人を生み出し、次世代につながる社会の実現へと繋がっていくことを心から期待しています。

最後に申し添えますが、ここで述べたことは決して不適切な保育を肯定するものではなく、また、子ども主体の保育を否定するものでもありません。これからも保育の質の向上と、現場に即した持続可能な制度の在り方を皆さまと共に考えていけたらと願っております。

東京都民間保育協会理事 片野 太郎
「とうきょう民保協 第185号」引用